教師が相手にする生徒の学力程度が同じくらいになり、授業準備が散漫にならないで済む。このような理由で、異なる学年を一緒のクラスに入れるやり方が増えてきたようだ。

では、具体的にどんな風に勉強しているのだろう。ちょっと社会科のクラスをのぞいてみよう。四年、五年はアメリカ及びカナダのインディアンについてである。子供達は先生の説明を聞いたり、映画を見たり、本物のインディアンの話を聞いたり、時には博物館にインディアン文化の実物を見に行ったりする。一通り説明が終わると、先生は四年には五年より少し易しい問題をくれる。子供達は答えを求めて、図書館の本や教室にある参考書を調べる。自分の答えが正しいか否かは、正解の書いてあるカードを見て、自分でチェックする。成績はテスト、態度、課題の処理の仕方を見て決める。天下り式に知識を与えられるのと違うし、時間をかけてするので、子供達は良く内容を理解し、覚えている。アメリカン・インディアン以外にもっと勉強して欲しいと思うことがらは沢山あるが、この年頃では、主に勉強の仕方を学んでいるので、これでいいのだろう。

子供はサッカーへ、母親は運転手に

さて、交友関係はどうなっているのだろう。日本もカナダも子供の精神、情緒の発達は同じと見え、四年生ともなると、男の子は女の子を毛嫌いして、一緒に遊ばない。学校でフォークダンスをする時など大騒ぎをするらしい。息子の場合、放課後のスポーツの試合やわるふざけをするときに、いつもくっついている仲間が三人いる。一人は警察官の息子で、気立ての優しい、ボーリング気違い。もう一人は、ブリティッシュ・コロンビア州立大学医学部教授の息子で、やたらと大人の表現を使いたがる、そばかすだらけのチャキチャキした子。一番仲良くしているのは建築技師の息子で、背は低いけど、活発なマメタンク。お誕生日のパーティーも結局、同じ仲間が違う場所で何回か集まるという風である。家の中でパーティーをすると、暴れてうるさいので、親はボーリング場、プール、映画などに連れて行く。そして、食事は、マクドナルドのハンバーガーが多い。

高学年になると宿題が多くなるそうだが、四年生では、遅れをとらない限り、宿題はあまりない。では、学校から帰ったあとは何をしているのだろう。もちろん、外で遊びまわるだけの子供もいるが、大抵、男の子は学校やコミュニティーセンターが主催するスポーツ、例えば夏から冬にかけてはサッカー、フットボール、春になると野球などのチームに入る。土曜日の試合のために、週二回練習がある。女の子もバレー、音楽、ガールスカウトなど何かに参加しているようだ。息子も小脇にバイオリンを抱えて、週に三回は音楽学校に行き、個人レッスンの他に、楽団に入ったりして楽しむ。音楽を習っている子供達は、精神肉体の成長のバランスを考え、ほとんどがスポーツもやっているので、甚だ多忙である。父親は息子の一週間の予定をいまだかって覚えたことがない。毎日「今日は何だ」「明日は何だっけ」と聞く。日曜日まで「今日は何だ。」母親は「今日は何だ」では済まされない。午後はタクシーの運ちゃんへと早変わり、子供をプールへ、音楽学校へ、スケートリンクへ送り届ける。子供が二、三人いる親はたまったものではない。筆者の友人も二人娘がピアノを習い、息子が野球のチームで活躍している。女性にしては運転が上手だと思ったが、やはり毎日の練習のたまものなのだ。

母親たちが集まれば、「忙しいわね」の連発だが、決して文句をいっているのではない。子供たちはいずれは家庭を離れ、独立していく。今が子供と共に生活していく尊い時間なのだということを認識して、子供の成長を楽しんでいるのだ。この楽しみがあるからこそ、母親はタクシーの運ちゃんを文句もいわずに兼業していられるのだろう。

以上、息子を通して見た子供たちの生活を書いてきたが、もちろん、家庭により地域により、種々様々な生活があるはずだ。しかし、カナダの学校は概して、のん気である。悪く言えば競争心に欠け、最後の一押しというか、ガッツというものがないような気がする。良く言えば、音楽、スポーツなど学校以外のことに精を出す余裕があるのだ。そして、全科目に秀でていなくても、ある程度の平均点を保持できれば、高校、大学にも行けるし、本人の興味のある分野や得意な方面を伸ばしていくことができる。こんな所がカナダの教育の長所ではないだろうか。

（写真はいずれもセント・ジョージ・スクールの学園風景。同校提供）